公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会
第6回アスリート委員会議事録

１　日時

平成28年7月12日（火）14時10分～15時50分

２　場所

虎ノ門ヒルズ森タワー9階　会議室ＴＯＫＹＯ

３　出席者

＜アスリート委員（各委員は五十音順）＞

高橋委員長、河合副委員長、池田委員、及川委員、大畑委員、齋藤委員、高倉委員、田口委員、萩原（智）委員、廣瀬委員、不老委員、松永委員

＜臨時委員＞

戸谷臨時委員（東京都オリンピック・パラリンピック準備局計画調整担当部長）、
芦立臨時委員（内閣官房東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会推進本部事務局総括調整統括官）

＜組織委員会＞

森会長、泉理事、谷本理事、武藤事務総長、布村副事務総長、佐藤副事務総長、小宮副事務総長、室伏ＳＤ、岡崎ＳＣＯ、中村ＣＦＯ、村里国際渉外・スポーツ局長

４　議事録

○高橋委員長

それでは、ただいまから第6回のアスリート委員会を開会いたします。

本日は、お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。委員長の高橋です。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

第5回のアスリート委員会から少し期間があきましたけれども、本当にリオオリンピ

ックは直前に、そして、東京オリンピックも着実に期間は近づいておりますので、今日もいつもどおりの活発な意見を皆様から御頂戴いたしたいなと思っております。

まず、初めに、本日の委員会のメディア公開について、お知らせをさせていただきたいと思います。

委員の皆様には事前にもう御案内をさせていただいておりますが、本日の委員会は、より開かれた組織委員会の運営を目指すといった一環として、今回は、記者の方々にフルオープンにさせていただいております。また、ムービー、スチールの皆様方に限らせていただきまして、これまで同様に会議の冒頭のみのオープンとさせていただきます。

今後もアスリート委員会の情報を積極的に発信していくために、また可能な限り公開をさせていただきたいとは思っているんですが、議題に応じてそちらのほうは対応してまいりたいと思っております。

それでは、開会に当たりまして、森会長から一言御挨拶のほどよろしくお願いいたします。

○森会長

もう高橋委員長からお話されたことが全てでございます。今日で6回目というふうに伺っておりますが、このアスリート委員会だけではなくて、皆様方は日々、アスリートの先輩方がたくさんおられるわけですが、そういう中で競技団体のこと、いろいろのことでスポーツのために御苦労いただいておることに対して、まずもって心からお礼を申し上げたいと思います。

それから、今年の1月、IOCのボケルアスリート委員会委員長がお見えになって、そのときに、これは室伏さんの発案だったと思いますが、IOC側の意見もあって、ワークショップを開いたそうでありまして、そのときには、委員会の正副委員長が、そして、委員の方、有志の方にも御出席をいただいて、東京2020の準備にアスリートがどのように関与していくべきかという、そういう熱心な議論をいただいたという報告を受けております。

この議論がきっかけになりまして、室伏スポーツディレクターと高橋委員長、河合副委員長が相談されて、アスリート・ファーストの大会の実現に向けて、アスリートの意見をより一層活かせる体制をつくるということで、本日この会議を開いて、また新たな提案がいただけるんだろうと思って大変期待をいたしております。

アスリートの意見を大会運営に、より積極的に取り入れていくということは、オリンピック・アジェンダ2020でも提唱されております。コーツ調整委員長からも、アスリート委員会のこうした取り組みへの期待が大変高まっておりますので、ぜひよろしくお願いをしたいと申し上げておきます。

それからもう一つ、これも、つい先月だったかと思いますが、皆さんのお仲間というか、NFの皆さんがやはり、これから組織委員会と密な関係を持っていただかなきゃならんことは特に多いんです。競技場のこと、事実、競技場でお互いの競技場や同じ会場で入れかえをしてほしいとか、変わってほしいとかというような意見がありまして、これは無事話し合いがつきましたけれども、そういうことがあったり。あるいは、今つくってくれている東京都側のいろんな施設について、NFのほうで希望がやっぱりあるわけですね。やる以上は選手の意向、アスリートの意向をやっぱりきちんと受けてほしいということについて。また施設側としては、真面目に取り組んでおられるわけですけれども、スポーツの特性みたいなものがやっぱりあるわけでしょうから。

そういう意味からでも、NFの代表とできるだけきめ細かく話し合っていくことが大事だろうということで、NF協議会というのをつくりまして、もうおなじみで、体協の長らく専務理事をやって、今、副会長である岡崎さんがこの協議会の責任者ということになっておりますので、これからもアスリート・ファーストということを組織委員会は一番大事に考えて、こういうことを措置をしたということでありますから、ぜひそのことも承知をしておいていただきたいというふうに思います。

以上、暑い中で、できるだけスマートに会議を行いたいと思いますので、そういう意味では私の長い話はスマートではないなと、自分で反省をしながら、大畑君がそんな顔して俺を見ているから、これで終わります。御協力よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

○高橋委員長

森会長、どうもありがとうございました。

続いて、アスリート委員の変更についてお知らせをさせていただきます。

資料1の委員名簿を御覧ください。

この度、板倉委員、大束委員が御都合により辞任されましたので、池田委員、不老委員が新たに着任をされました。ということで、いきなりなんですけど、お二人から一言

ずつ御挨拶をいただけるとうれしいです。よろしくお願いいたします。

〇不老委員

日本クレー射撃協会副会長を仰せつかっております、不老と申します。

今、御紹介がありましたように、前任の板倉からこの度、アスリート委員ということで出させていただいたわけでございますが、どうぞよろしくお願いをいたしたいと思います。

また、アスリートといたしましては、ソウルでのアジア大会、団体で銅メダル、それから1988年ソウルオリンピックに出場いたしました。

以上でございます。

〇高橋委員長

不老委員、ありがとうございました。これからどうぞよろしくお願いいたします。

続いて、バトミントンですね、池田委員、よろしくお願いします。

〇池田委員

皆様、はじめまして、元バトミントン選手の池田信太郎と申します。

この度、前任の大東忠司委員から引き継いで、参画させていただきます。

前回までの資料を全て、ある程度目を通したんですが、フォローできていない点等々あると思います。皆様からいろんな情報と今後の進む方向等々をディスカッションしながら、ゴールに向かって進めればいいなと思います。

競技としては、ロンドンと北京オリンピック、2大会連続で出場してきました。なので、この中でいうと、ひょっとしたら一番若い、アスリートを引退した後の選手になると思いますので、フレッシュな気持ちで頑張りたいと思います。引き続きよろしくお願いいたします。

〇高橋委員長

池田委員、どうもありがとうございます。これからどうぞよろしくお願いいたします。

なお、本日はお手元配付の座席表のとおり、12名のアスリート委員と政府と東京都から1名ずつ臨時委員として御出席をいただいています。やはり、リオのオリンピックの直前ということで、リオ大会に関わっていらっしゃるアスリート委員の人たちもとても多いですので、今回は少し少ない参加ではありますけれども、その中でも皆様の意見、積極的な意見を頂戴いたしたいと思います。

それでは、この後、議事に入りますので、すみません、ムービーとスチールの方は御退席いただけますように、どうぞよろしくお願いいたします。

（プレス　退室）

○高橋委員長

それでは、これより議事に入りたいと思います。

お手元の議事次第を御覧ください。本日の議題は大きく3点となります。

まず、議題1の大会準備関係の取組状況のうち、Tokyo2020大会ボランティアプログラムの方向性について、事務局からの説明をよろしくお願いします。

○手島総務局長

総務局長、手島でございます。

ボランティアプログラムにつきまして、私のほうから説明させていただきます。

オリンピック・パラリンピック競技大会は、選手や大会関係者だけではなく、子供から大人まで、さまざまな方々の参画によってつくられてまいります。Tokyo2020大会を成功に導くに当たりましては、大会運営に必要な人材について、ボランティアの協力は不可欠でございます。大会基本計画におきましても、必要なボランティアの確保を行いまして、育成することを人材管理の主要目標として掲げているところでございます。

本日は、その方向性のたたき台、まさに素案でございますが、これにつきまして、皆様から御意見を頂戴したいと思っております。委員の皆様からいただきました御意見、これを踏まえまして、大まかな方向性、これを固めていきまして、理事会にも諮っていきたいというふうに考えております。

また、8月に行われますリオ大会におきまして、大会ボランティアプログラムの内容を検証した上で、10月以降にホームページ上でさらしまして、方向性を公開し、皆様から御意見を頂戴し、最終的に取りまとめていきたいというふうに考えております。

それでは、資料の2を御覧いただきたいと思います。

まず、ボランティアについて若干説明をさせていただきます。一口にボランティアと申しましても、2020年のオリンピック・パラリンピック大会時には、さまざまなボランティアが活躍をすることになります。このうち、組織委員会が企画・運営をするのが、左の上のほうに大会ボランティアということでくくってございますけれども、こちらになります。

ロンドン大会などの過去の大会から積算をいたしますと、8万人くらいのボランティアが必要だというふうに言われております。一方で、各会場がございます所在地の自治体が募集、採用していくのが、都市ボランティアと呼ばれるボランティアでして、主に大会会場の外で道案内ですとか、観光案内、こういうものを担当いたします。

ちなみに、東京都におきましては、都市ボランティアとして約1万人を育成をするというふうな計画だというふうに聞いております。それ以外にも、事前キャンプを行う自治体ですとかが主催するボランティアもございまして、全国で活躍が想定をされているところでございます。

次に、大会ボランティアについて、もう少し説明をさせていただきますと、組織委員会として大会ボランティアの方々には、ユニホームの支給ですとか、研修機会の提供、こういうものを予定しております。まさに、大会運営の担い手として育成をしていく考えでございます。

また、大会ボランティアは大会の印象を決める大事な構成要素であるというふうに言われておりまして、東京大会におきましても、できるだけ多くの方々に御参加をいただきまして、大会の盛り上げを創出していきたいというふうに考えております。

一方で、ボランティアでございますので、報酬はなく、無償で当日の宿泊代や東京までの交通費につきましても、基本的には自己負担、自己対応していただくというふうに考えております。

次に、大会ボランティアの役割でございますが、これはいろいろ多岐にわたりますが、イベント、サービス、警備、テクノロジーサービス、ハウスキーピングなど、多岐にわたっております。ロンドン大会では37の種類に区分をいたしまして、ボランティアを募ったところでございます。

次に、Tokyo2020大会のミッションについてでございます。

東京大会における方向性を検討するに当たりまして、ボランティアの役割、ミッションをどうするか議論をしてまいりました。その際、東京らしさをどう出していくかということを考えますと、その基礎、礎となるのは、やはり基本計画に掲げました大会ビジョンでございます。左のほうに囲ってございますけれども、三つのコンセプトから成り立っております。

そして、もう一つが、Tokyo2020スピリットでございます。このスピリットは、出身

母体もさまざまな組織委員会の職員が、大会の成功に向けまして、共有すべき価値観を明確にし、組織運営、人材管理を行っていくことを目的に策定をされたものでございまして、ビジョンの実現に向けて、昨年4月に策定をしたものでございます。

東京らしさを議論する上で、この二つの理念を踏まえ、大会ビジョンからは「全ての人が自己ベストを目指す」、また、スピリットのほうからは「1チーム」。この二つからミッションといたしましては、「一つのチームで自己ベストを実現する。アスリートの　観客の　自分自身の」ということで考えてみました。このミッションにつきましても、ぜひさまざまな御意見をいただければというふうに思っております。

続きまして、ボランティアに望まれるものでございます。

こちらは、ロンドン大会、リオ大会のものを横引きをしております。コミュニケーション能力ですとか、語学力、年齢、参加をしていただける時期等、七つの望まれるものを掲げてございます。

事前に資料配付を委員の皆様にはさせていただきましたけれども、その中で、萩原委員より年齢のところで、18歳以上ということで高校生を除いているんですけれども、高校生も含めたらどうでしょうかという御意見も頂戴いたしました。確かに年齢というところで切っておりますので、そこで高校生であるか、否かというところは、除いてもいいのかなということもございますので、削除の方向で検討をしてまいりたいというふうに考えております。

次に、おめくりいただいて、6ページになります。ミッションを実現するための具体的な施策について、今後三つのフェーズに分けまして検討をしていきたいというふうに思っております。

大会前、大会直前、大会中、大会後と分かれますけれども、特にロンドン大会に比べまして、東京はまだボランティア文化というのが根づいてございません。ですから、特に2020年大会を通じまして、ボランティア活動を経験した人というのは爆発的に増えると思います。この方々が2021年以降の各種スポーツイベント等で活躍できるように、レガシーとしてボランティア文化の定着に寄与していけるような取り組みを特に検討していきたいというふうに考えております。

続きまして、7ページになりますが、全体のスケジュールです。具体的なボランティアの募集は、大会の2年前、これロンドン大会もそうだったんですが、2年前の具体的に

は18年8月くらいを予定しておりますが、その後、面接を経て、採用決定を行う予定でございます。

その中でも専門性の高いボランティアにつきましては、少し早目のタイミングで、採用、育成等を検討をしております。また、ボランティアリーダーにつきましても同様でございます。一般の方々につきましては、2020年に入りましてから、オリエンテーションですとか各種研修などの教育を受講していただく、そういうふうな流れで今、予定をしております。

以上が、オリンピック・パラリンピック大会のボランティアプログラムの大きな方向性でございます。

冒頭申し上げましたが、これはあくまでもたたき台でございまして、ぜひ皆様からいろいろな意見を頂戴できればというふうに考えております。

また、先ほど萩原委員の話をしましたけれど、これ以外にも幾つか御意見を頂戴しておりまして、採用の面接を東京だけじゃなくて、それ以外のところでもやったらどうでしょうかというような御意見ですとか、学生さんは教育機関の許可を得た上で、単位の取得の可能性についても御検討いただけないかなどの意見も頂戴したところでございます。

ボランティアの採用につきましては、県外にも会場を保有している都市などもございますので、東京以外での面接につきましても積極的に検討していきたいと思っております。

また、単位につきましては、これ以外にも、実は7月の大会になりますので、大学生になりますと前期の試験の期間と重なるようなところもございます。こういう幾つか課題がございますので、私どもとしましては、ボランティアがしやすい環境整備というところに重点を置いていきたいと思っておりますので、文科省をはじめとしまして、いろいろと意見交換をしながら、より多くの皆さんが参加できるような、そういうことで後押しをしていければというふうに考えております。

どうぞよろしくお願いいたします。

○高橋委員長

ありがとうございました。

委員の皆様方には事前にこちらの資料を送付させていただきまして、今日検討をする

ということの旨をお話させていただいております。

この後、質疑応答の意見交換の時間とさせていただきたいと思うんですけれども、その意見交換の主な趣旨といいますと、8ページになります。資料2の8ページ、各専門委員の皆様のお立場により、2020年大会ボランティアについて期待をすること、大会ボランティアのミッション、そして大会ボランティアに望まれるものなどについて、御意見をお伺いしていきたいなというふうに思います。

挙手をしてお願いしたいなと思ってはいたんですけれども、今ちょうど事務局のほうからも萩原さんが少し、提案があったということですので、萩原さんにその提案を少しもう一度お聞きさせていただきたいなと思います。

○萩原（智）委員

皆さん、こんにちは。萩原です。

今、事務局のほうから説明していただいたとおりで、18歳の高校生のことについてなんですけど、いろいろ問題はあると思うんですが、やはり今回選挙権の問題も、得たということなので、そういうところも含めて検討していただきたいのと、あとは、やっぱりレガシーとして、高校生という立場の皆さんが、そういった国際的なイベントをボランティアの経験をすることによって、より、社会に出たときに大きな夢とか役割というものを果たせるきっかけになるんじゃないかなというのも含めて提案をさせていただきました。

○高橋委員長

事務局さんのほうからは、先ほどその説明がございましたけれども、意見を言っていただいて、それに対する回答だったり、今のような形で応えていただくこともできますので、本当に皆様の今までの経験上、ボランティアのいろいろな大会に参加をされていると思いますので、そういった中で感じたボランティアというものをぜひ、お話をしていただきたいなと思います。どなたか意見が。

田口さん、お願いします。

○田口委員

田口です。よろしくお願いします。

私は、3大会パラリンピックに出させていただいて、どのボランティアの方もフレンドリーでよかったんですけども、私が選手として関わった中で、やっぱりボランティア

に求めることは、責任感だと思ったんですね。

例えば、どの大会というのはちょっと言いづらいんですけども、大会会場でバスに乗りたい、大会会場に行くためのバスを選手村から乗りたい。そのときに、どうしても射撃の場合は一斉に打ちますので、みんながバスに乗ってしまうと、次、バスがいつ来るかわからないということに、周りのボランティアに聞くんですけども、「何々だと思う」とか「多分何々」とか言われると、選手にとってはもう、思うとかではなくて、必ず何というものを教えてほしいんですね。

あと、ほかにあったのは、試合に一人で行かなければいけなくて、そのときにバスだとちょっときつかったので日本チームに貸し出している車を使うことになったんです。選手村の車乗り場で待っていたんですけど、時間になっても全く来なくて、15分くらい過ぎてコーヒーを持ってきて、「はーい」みたいな感じで来て。日本人の場合そういう時間にルーズというのはないとは思うんですけども、そういう意味ではそういう決められたこと、やっぱりそれも責任感だと思うんですけども、そういうのもあっていただきたいし。

反対に、私たちは試合が終わった後に、試合を見に行ったときに、車椅子の席がどこだといっても皆さんがわからなくて、「あっちだと思う」。あっちだと思うといって行くと、そこはこのアクレでは行けないとか、そうなっている間に試合が始まってしまっていたとか、そういうのもありますので。

そういう意味では、ボランティアの方たちに責任を持っていただきたいですし、反対にボランティアの人たちが電話すればわかるコールセンターみたいな、ボランティアの人たちがわからないことをどこかの事務局の本部みたいなところに電話すれば、聞いたらそこで的確に教えてもらうところというのをつくってはどうかなと思います。

私たちとかあと観客の方々にとっても、ボランティアの方って全部一緒、ボランティアですけども、先ほどおっしゃっていたとおり、37種類とかにボランティアが分かれているように、それぞれきっと会場ボランティア、何たらボランティアがあるので。ただ、それを見分けては質問はできませんので、そういうときに、そのボランティアの方がどこかに聞けばわかるというのをつくってはどうかなというふうに思います。

あとは、私の射撃という種目の特性上なんですけども、射撃の会場で多分ボランティアの方をたくさんまた用意してくださるとは思うんですけども、どの人が銃を運んでい

いボランティアなのか、日本の銃刀法というもとでされると思いますので。選手たちは、海外に行けばどの人に頼んでも銃って持ってもらえるんですけども、日本でやる限りは銃刀法のもとでされると思いますので。ちょっとその辺の運営がまだわからないんですけども。そのときに、選手にぱんと「持っていって」と渡されて、その人が実は銃を持ったらいけない人というのだと、もうそこで罪というか、あれになってしまいますので、そういう意味でも、そういうところをどういうふうに分かれるのかなというのを私はすごく気になります。

あともう一つ、パラリンピックの場合は、みんな自分の車椅子以外に、種目用の車椅子とかいろんなのを持っていますので、多分すごく人がいると思います、一緒に道具を運んでいただく。そういうのもお願いしたいと思います。

○手島総務局長

どうもありがとうございました。

まず、最初の責任感というところは、私ども本当にそこが一番大事だと思っておりまして、タスクを託すといいますか、本当に責任を持って与えられたミッションをこなしていただくというところでは、研修も実は3回、全体研修から個別研修も含めまして充実させる予定でもございます。

しかし、それだけで全部カバー仕切れるものではございませんので、募集のときからきちんとやっぱり心構えというとあれですけれども、期待するというところでは、はっきり明記をさせていただいてというところがございます。

また、ボランティアのコールセンターの発想というのは本当にありがとうございます。ぜひ、ボランティアも全てを全部わかっているわけではございませんので、今、御示唆いただきましたように、問い合わせればわかるというその仕組みはすごく大事だと思いますので、ぜひそういうボランティアのコールセンターみたいな発想も取り入れて、検討していきたいというふうに思います。ありがとうございます。

最後のあれは、確かにとても大変だと思います。ぜひ、たくさんの方から御協力いただけるように、人材の確保に努めてまいります。ありがとうございました。

○高橋委員長

選手は本当に命がけでオリンピック・パラリンピックを戦いますので、その思いを一緒に共有してもらえるような、そんなボランティアの姿であってもらいたいなというふ

うに思うとともに、ちょうどロンドン大会では、語学のほうのボランティアのところに、自分は何のボランティアなのか、韓国語のボランティアですよ、英語のボランティアですよ、何語のボランティアですよというような、マークというかバッジがついていましたので。自分が関わる人、ここで話しても通用しないんだなというようなことが一目瞭然でわかるような、そんな判断をすることができました。

ただ、今お話を聞くと、語学だけではなくて、違う何か、自分は何のボランティアなのかというものがやはり、ぱっと見でわかるような形で、何回も声をかけて失敗するよりかは、このボランティアはこの人なんだというのが選手側からわかるような仕組みを何かつけてもいいのかなというのは私自身、今、感じました。

ありがとうございます。

ほかに何か御意見のある方。

池田さん、お願いします。

〇池田委員

池田です。よろしくお願いいたします。

先ほど、田口さんのお話の中で、やっぱり責任感だとかいろいろあったと思うんですけれども、事前に資料をいただいたので、やはりどういったものがボランティアに資質として必要なのかなというふうなことで、この紙にも書いてあるんですが、やはり語学が話せるというところ。

あと一つ、やはり田口さんおっしゃったように、どこかの道に行きたい、駅に行きたい、観光地に行きたいといったときに、実際、東京の人じゃなくて、地方から来て、地理がわからないということに現状なると、そこからスマホを出して、地図を広げてということになると時間がかかって、こういう時期のオリンピックになるので、非常に炎天下の中で説明するのに時間がかかるということがリスクとして挙げられるんじゃないかなと思っているので、ある程度、東京の地理に詳しいだとか、事前の研修の中でやはりそういったプログラムを入れていくというのは、結構重要なのかなというふうに思っています。

また、そういったプログラムの中で、やはりボランティアの質というのも非常に大切になるのかなと思っていまして、学生で時間がある人材が非常に確保しやすいターゲット層だと思うんですけれども、じゃあ、社会人で組織に慣れている人をリーダーにした

いとなるときに、やはり優秀な人材を上に立てるということは、組織をつくる上では非常に大切だと思うんですね。そういう人材をどういうふうに確保できていけるのか。

平日の研修の時間がどうしても業務で行けないというふうになると、東京オリンピックのときには参加したいんだけれども、研修が受けれなくて断念をする方もいらっしゃると思うので、そのプログラムはオンラインにして、ある程度ここまでやった方に関しては採用という形で、2020の東京オリンピック・パラリンピックの期間だけ参加してもらうとか、ということができれば、ひょっとしたらもっと幅広い世代、幅広い人材から支持を得られて、いい人材が確保できて、リーダーにできるような人材が確保できることで、円滑にもろもろできることになるんじゃないかなというふうには思いました。

また、最もイノベーティブなものにオリンピックをしていこうというところがあるので、例えば地図、観光地といったところで、恐らくある程度、スマホがこれだけ普及していく中で、タップすればその場所には行けるということは、クリアになると思うんですけど、いざ駅まで本当に道がわからないとなったときに、参加している方が主婦層で、スマホもさわったことがないという方だと、何かしらITリテラシーのない方だとトラブルが起きてしまうと。なので、ある程度ITリテラシーの高い方を採用して、ある程度スマホで何か地図を、URLか何か出して向こうに拾ってもらって、それで向こうに行ってもらうということなので。ある程度、テクノロジーを使いながら、円滑に誘導することはできないだろうかというふうなのにも実際考えました。

なので、実際ボランティアの中でリーダー的な存在が恐らく必要になる。その下でしっかり言ったことを実行してくれる方が人材としては必要になる。その方たちをどういうふうにピックアップするか、教育のプログラムをつくっていくか、参画しやすくするか、ハードルを下げるかというところも、実は大切になるんじゃないかなとは思いました。

以上です。

○手島総務局長

どうもありがとうございます。

まず、ちょっと順番はあれになりますが、ボランティアリーダー、確かに本当に8万人からのボランティアを確保いたしますが、そのリーダーになる方々がすごく大事になると思っています。

今、想定を幾つかはしているんですけれども、例えば、今、各大学にボランティアセンター等がございますので、そこの職員の方々にぜひ御協力をいただけないかとか、そんなこともボランティアリーダーとしては考えておりますし、また東京マラソンをはじめ、いろいろな各種競技、スポーツ行事等で、もうボランティアを経験しているような方々もいらっしゃいますので、そういうところからとか、いろいろなところからボランティアの経験のある方々に来ていただいて、リーダーをというようなことも一つは考えているところでございます。

また、研修につきましても、おっしゃるとおりお忙しい中で必ず来ることということになりますと制約もありますので、eラーニングといいますか、インターネット上の研修をしてという、本当に一つの方法だとも考えておりますので、その辺につきましても、今後検討をしていきたいというふうに考えております。

あと、まさに研修プログラムの中身をどのように充実するかということで、道案内の例示もございましたけれども、研修内容をやっぱり、よりよいものにしていくということは、これからまだ4年間ございますので、宿題、御提言もいただきましたので、それも踏まえて、研修の中身を検討していきたいというふうに考えております。

どうもありがとうございました。

○高橋委員長

ありがとうございました。

ほかにも御意見はないでしょうか。

及川さん、よろしくお願いします。

○及川委員

車椅子バスケットボールの及川です。

僕は3点あります。一つは、まずパラリンピックレベルというふうに思ったんですけども、世界の大会での障がい者スポーツの祭典というくくりで考えたときに、ボランティアに関してはいろいろ考えなきゃいけないなというふうには思いました。

一つは、教育、ここにも書いてあると思うんですけども、いろんな側面で学んでいく必要があると思うんですが、一つは、やっぱり障がい別、いろんな障がいの方々がこの大会に参加すると思うんですが、アスリートだけじゃなくて、スタッフもそうですし、もちろん観客の中にもいろんな障がいを持った方が来られるであろうし、もちろんボラ

ンティアの中にもそういう方々がいらっしゃると思うんです。

そうした場合に、どうコミュニケーションを図っていくかということを考えたときに、いろいろな例えば視覚障がい者の方々と、じゃあ何かをしなければいけないということになったときに、そのコミュニケーションの図り方がわかるのかどうかとかいうことを一つ考えても、障がいという側面で教育をしていくことというのは、すごい重要かなということと、あとは競技別。多分、その障がいの知識が組み込まれた状態でスポーツをしているので、もちろん競技のことに関してもよく知っておくということは必要かなというふうに思います。

または、僕も何回も国際大会に行って思うことなんですが、国によってやっぱり文化が違うんですね。先進国の障がいを持っている方々の意識とそうでないところの意識とか、参加してくる国々によっての背景だとか、そういったことは、実はすごい重要かなというふうに思ったりもします。

そういうことを考えていくと、とてつもなくいろんなことをやらなければいけないというふうに思ってしまうので、ここにも書いてあったんですけども、早めにNFと組んで経験を積んでいくということが必要で、車椅子バスケットボールも来年から国際大会を企画していますし、そういったところにボランティアプログラムとして入ってきてくれると、一緒にできたりするんじゃないかなというふうにすごい思います。

最後は、僕はロンドンのときにアシスタントコーチで行ったんですが、すごいよかったのは、オリンピックのリエゾンをしていて、そのままパラリンピックのリエゾンに入ってきたんです。バスケットボールをやっていたんですけども。オリンピックではアメリカのバスケットボールのリエゾンをやっていて、オペレーションに関してものすごくよくわかっていて、もちろんアメリカなので、NBAの選手がいっぱいいるようなチームのリエゾンをやっていたので、パラリンピックにそのまま彼女は来て、日本代表についてくれたんですけども、動き方から、バスの移動から、ドーピングに関することから、全部我々のオペレーションに関する知識というか、こうしたほうがいいよ、こうしたほうがいいよというのが全部わかっていて。なぜというと、オリンピックでちゃんとやってきたからと言われていたんですね。すごいいいなというふうに思っていて。

オリンピックとパラリンピックを連携させるためにも、そういったボランティアのつながりというのがあると、僕らはすごいチームとしては助かりました。

以上です。

○手島局長

どうもありがとうございます。

障がい別のというところは、障がい特性というのをきちんと正しく理解するというところが大前提でございますので、そこにつきましても、きちんとした研修も通じて、検証していきたいというふうに考えております。

また、競技についても、やっぱり競技の正しい理解、これも当然研修の中で行っていこうと思っておりまして、また一つ望まれるものとして書かせていただきましたけれども、やっぱり競技を知っていただく、見ていただくという経験といいますか、知識というのは本当に大事だと思いますので、募集から少し時間もありますので、ぜひその方々に競技を経験していただいたり、参加していただく、そういう機会を、先ほど三つのフェーズに分けて取り組みをとありましたけれども、大会前にもぜひそういう機会に参加をさせていただくようなことで、経験値を積んでいければというふうに思っております。

また、オリとパラの連携というのは、本当にそのとおりだというふうに思いますので、ぜひボランティアの方々にも両方やっていただけるような、ちょっと期間が長くなってしまうようなところもございますけれども、ぜひそういう配慮もしていければというふうに考えております。どうもありがとうございました。

○高橋委員長

ありがとうございます。

ほかに御意見がある委員の方はいらっしゃいますか。

では、議題も続くので、このボランティアのことはこちらのほうで閉めさせていただきたいと思うんですけれども。37のボランティアが前のときにあったというふうにお聞きしましたけれども、今、本当に選手で参加できない人たちというのは、ボランティアで何かしらで参加をしたいという声をすごく聞きますので、自分はどの分野だったら協力をすることができるのか。今だともう70歳くらいの方が、僕は英語を話し始めてということも聞くんですが、どんなものが自分には一番合うのかということをなるべく早く知ることによって、18年の募集が始まる前からそういうのも開示していただくと、もっと多くの人たちがそれに向けて少し準備をする期間があるのかなという感じがいたします。

あと、やはりスピリットの中、いろいろありましたけれども、やはりボランティアは相手を思いやれる、そんな心を養う、そんなことだと思うので、日本だけではなく、大会が終わってからも、世界に対しても目が向けられるような、そんな人たちが増えてくるといいなという思いもあります。

あともう一つ、私は自身の大会でマラソン大会を持っているんですが、やはり、ただ水を給水をするといった作業のボランティア、わかりやすいボランティアなんですけれども、それでも1年目、2年目はかなり反省点も多く、なかなか大会として成功と言えるような状況ではないような形で、3年目くらいからしっかり形になったのかなという部分はあります。やはりオリンピックという大会ですので、こちらのスケジュールには3フェーズに分けてということで、テストイベントやイベントなども繰り返されるみたいですけれども、しっかり形になるところまでしっかりやっていただけるといいなという思いはあります。

それでは、たくさん御意見ありがとうございます。

続いての議題に移りたいと思います。次は、Tokyo2020アクセシビリティ・ガイドラインの概略についてです。

事務局から説明をよろしくお願いいたします。

○井上局長

大会準備運営第一局長の井上でございますけれども、座って説明させていただきます。

Tokyo2020アクセシビリティ・ガイドラインの概要につきまして、御報告をさせていただきます。

先月になりますけれども、6月17日に開催をいたしました、アクセシビリティ協議会、この協議会は、当組織委員会と内閣官房、そして東京都が共催をして開催をしているものですけれども、その第4回の協議会におきまして、これから御説明をさせていただきますTokyo2020アクセシビリティ・ガイドラインを御承認、取りまとめていただきました。

このアクセシビリティ・ガイドラインでございますけれども、建物の構造からスタッフのトレーニングに至るまで、ハード・ソフト両面でのアクセシビリティの実現を目指す内容となっておりますけれども、東京大会の会場やアクセシブルルートの整備指針ともなるものでございます。

今、取りまとめをしていただきまして、そして7月中、今月中に国際パラリンピック委員会、IPCに対しまして申請を行いまして、その最終承認を得た後には、幅広い方に御参照いただけるよう、一般公開もする予定となってございます。

ガイドラインに基づくさまざまな取り組みを積み重ねていって、オリンピック・パラリンピックを契機として、全ての人々が相互に人格と個性を尊重し合う共生社会の実現に一層近づいていきたいと、そういうふうに願っているところでございます。

それでは、今回のガイドラインにつきまして、パラリンピック統括部の仲前課長より、ガイドラインの内容のほうの概要の報告をさせていただきます。

○仲前課長

パラリンピック統括部の仲前です。

お手元の資料A3のものですけれども、Tokyo2020アクセシビリティ・ガイドライン申請資料の概略を御覧ください。

冒頭の1番、それから2番については、井上局長からの説明がありましたので、私からは3番、基準の設定から御説明をさせていただきます。

なお、このガイドラインですけれども、パラリンピックのみならず、オリンピックの競技会場にも適用されるということでございます。

数値の基準ですけれども、IPCが持っているアクセシビリティ・ガイド、それから国内の関係法令、東京都の条例などに基づいて整理をしております。

東京都の関係条例ですけれども、国の法令よりも高い水準を持っているものが多くございます。中にはIPCが設定している数値基準とほぼ同等水準のものも多数ございます。IPCガイド・国・東京都それぞれにいろんな項目、それを2段階ないしは3段階で基準があるんですけれども、東京大会のガイドラインではこれらを勘案して、推奨基準、標準基準、この二つに整理をしております。水準の高いものが推奨基準ということで御理解いただければと思います。

推奨基準ですけれども、東京都の条例並びにIPCのガイドにある、ぜひこのレベルまで引き上げて大会運営をやってほしい、そういったものになってまいります。非常に高い水準となります。

主にですけれども、新設の会場ですとか、主要駅のアクセシブルルート、いろんな配慮が必要な方が安心して通っていただけるルートに対して、大会時に適用する範囲を想

定しております。

標準基準については、IPCガイド、東京都の基準などで必ず守ることとされている数値、それから、国の法令で推奨されているものを比較検討して、相対的に高いものを選ぶようにして策定をしております。東京会場は非常に既存の会場を多数使うことになるんですけれども、こういった会場ですとか、アクセシブルルートとして大会時に使う範囲を想定したものになります。

なお、建物等々、構造上の理由によって、どうしても標準の基準を満たせないというケースが例外的に発生してくることが考えられます。こういった場合ですけれども、少なくとも現行の国内の法令ですね、こちらのほうは必ず守るということで約束をして、各方面との調整に当たっていくということになります。

続いて、4番、ガイドラインを踏まえた今後の整備の考え方の説明をさせていただきます。

まずは、対象の競技会場等の所有者並びに管理者の方に、このガイドラインの内容を御理解いただいた上で、ガイドラインに即した施設の建設あるいは改修工事等々を実施していただくようにお願いをいたします。将来的なレガシーとなる恒常的な施設として整備をしていただけるようにということで、ぜひお願いをしたいと働きかけを行います。

続いて、恒常的な施設として、大会までに整備が困難な場合、スケジュールの関係等々、そういったケースも出てまいります。こうした場合については、大会に必要なレベルを仮設の対応で整備をしていく、ないしは、先ほど説明がありましたが、ボランティアの方に人的なサポート等々を行っていただいて、必要なサービス水準を満たした大会運営を期していくということになります。

5番のガイドラインに記載をしている内容を一部抜粋をした御紹介がありますけれども、この中で三つ目にあります「会場・ルートのエレベーターのかごの大きさ」というものを例に挙げて、数値について少し説明をさせていただきます。

まず、推奨基準にある、かごの大きさですけれども、寸法だとちょっとわかりにくいんですけれども、大体24人乗り程度の大きさになります。ちなみに、このビルのエレベーターは26名乗りだったかと思います。24人程度が乗れる定員ですと、一つのエレベーターのかごに、車椅子に乗っている方が3名から4名乗ることが可能です。

標準の大きさのかごは、17人定員くらいの大きさになってまいります。こちらですと、

一つのかごに1回に二、三名程度の車椅子の方が御利用が可能です。以前のこの委員会の中でも、エレベーターに関する混雑状況についてお話を伺ったことがあります。こういったお話を関係者とも共有をして、ガイドラインの対象となるさまざまな会場等の施設の事例、現状を考えて、エレベーターの大きさについての基準を策定をしていきました。

一方で、先ほども出ていたんですけれども、既存の会場、ないしは会場の最寄り駅など、組織委員会から各事業所の方へ改修を働きかけていくんですけれども、基準に沿ったエレベーターを新しく増築するということがスペースの都合などで難しい場合も考えられます。こういった場合ですけれども、基準より若干大きなものでも、追加で新たにエレベーターを設置していただくなど、全体のエレベーターで運べる人数を増やしていただく等々の対応をお願いするというようなことも視野に入れております。

そのほか、2枚目のほうにも具体的な、ちょっとイラストで示したものなどがございますけれども、主にはいろんな障がいのある方、ないしは同じような配慮が必要な方のことを考えて、計画的に施設の設計を行う、それに基づいたトレーニングを行うというようなことを網羅したものでございます。

以上となります。

○高橋委員長

御説明どうもありがとうございます。

それでは、今のアクセシビリティ・ガイドラインについての御質問や御意見など、ある方は挙手のほうをよろしくお願いいたします。

以前の委員会のときに、柔道の穴井委員がこのオリンピック・パラリンピックを東京でやるに向けて、パラリンピアンが住みやすい、そんなまちづくりというのが、結局は健常者の人たちにもすごく住みやすい、そんなまちづくりになるんだというお話があったように、またこれは東京オリンピック・パラリンピックが終わった後の一つのレガシーとして、やはり残っていくことだと思いますので、こういうのがどんどん進んでいく、こういう変化があるというのは、すごくうれしい報告だなというふうに今、感じております。

それでは、意見がないようですので、次の議題に移らせていただきます。

では、議題の2、アクション＆レガシープラン、スポーツ・健康についてです。

事務局からのこちらの説明をよろしくお願いいたします。

○桑原部長

アクション＆レガシープランスポーツと健康を担当しております桑原です。どうぞよろしくお願いいたします。座って失礼いたします。

それでは、お手元の資料4－1を御覧ください。アクション＆レガシープラン2016の策定に向けてということで進めてまいります。

まず1ページ目です。これまでの検討経過でございます。第1回～第5回のアスリート委員会で御検討いただきました。今年の1月25日の理事会におきまして、中間報告が公表されております。本日第6回のアスリート委員会での報告・検討事項を踏まえまして、7月25日の理事会におきまして、アクション＆レガシープラン2016が公表される予定でございます。

では、次に参ります、2ページ目おめくりいただきまして、3ページ目です。これまでのアクション＆レガシープラン2016全体概要を簡単におさらいさせていただきます。

基本的な考え方、アクション＆レガシーは、一人でも多くの方が参画して、成果を未来に継承するレガシーということで、5本の柱、「スポーツ・健康」「街づくり・持続可能性」「文化・教育」「経済・テクノロジー」「復興・オールジャパン・世界への発信」と、これらをオールジャパンで取り組むものでございます。

次のページ、4ページ目でございますが、2020年に向けたスケジュール概要ということで、今年の7月アクション＆レガシープラン2016の公表、その後、リオ大会を迎えまして、2020年に向けて各種アクションを実施してまいります。

その後、2020東京大会を経まして、アクション＆レガシーレポートというものを策定していくというスケジュールとなります。

それでは、5ページ目に参ります。それでは、「スポーツ・健康」分野の概要ということで、「スポーツの力」でみんなが輝く社会へということで、目指すレガシーの方向性は、誰もがスポーツを「する・観る・支える」社会の実現、アスリートが活躍する社会の実現、パラリンピックを契機とした共生社会への実現ということを、オールジャパンでさまざまなアクションを推進していくと。これまでの委員会でも、いろんなアイデアをアスリート委員の方々からいただきました。

次、6ページ目でございます。中間報告を本年1月に出しました以降に、幾つか検討・

取り組みしてきたことが書かれております。5本の柱に共通する三つの重要な視点。参画・パラリンピック・大規模大会との連携といったことを追記しております。

その他、新たなアクション例の更新等を行ってまいりました。

7ページ目ですが、具体的な取り組みというものも、「スポーツ・健康」分野で行いました。今年2月に行われました東京マラソンにおきましては、マラソンのEXPO会場でトークセッションを行いました。アスリート委員会の協力によって行われました。また、日本体育協会さんが発行しております「Sports Japan」誌上での正副委員長の対談、こちらも3月に行っております。

次に、8ページ目です。「東京2020参画プログラム」についてということで、これは初めてこちらで御説明させていただくものになります。

9ページ目をおめくりください。まず、プログラムの概要でございますが、さまざまなアクションに対しまして、組織委員会からマークを付与する、そのような仕組みを構築いたします。目的といたしましては、オリンピック・パラリンピックムーブメントへの参画促進、またレガシー創出に向けたアクションの促進ということになります。

10ページ目でございます。アクジョン＆レガシープランと東京2020参画プログラムの関係ということで、ここに図表がございますが、アクション＆レガシープランというものは、コンセプトを提示するものでございます。それに対しまして、参画プログラム、こちらは、マークの付与することによって、東京2020大会とのつながりを創出し、オリンピック・パラリンピックムーブメントへの参画を加速・促進していくものとなり、お互いが相互を補完し合う関係になっております。

次、11ページ目でございます。こちらの参画プログラムのまず対象でございます。これはさまざまなステークホルダーが実施するイベント・事業等のアクション、これで組織委員会の定める一定の要件を満たすもの。これを東京2020公式認証プログラムと東京2020応援プログラムと2種類に区分させていただきます。この区分に関しましては、後ほど御説明させていただきます。

認証を受けることで実施可能な事項ということで、認証マークの使用、「オリンピック・パラリンピック」の文言を使用することができる。または、組織委員会が認めたイベントとしての実施ができるということでございます。

次に、12ページ目でございます。先ほど二つのプログラム名を申しましたが、こちら

についてでございます。まず、東京2020大会公式認証プログラム、こちらの実施主体は、会場地のあります開催都市、あとJOCさん、JPCさん、スポンサー企業さんが実施主体となりまして、付与されるマークは右側に書かれております、これリオ大会の例ですが、OCOGマークといいまして、組織委員会のエンブレムにマークがくっついたものという形になります。

もう一つのほうは、東京2020大会応援プログラム。こちらは実施主体が非営利団体等で、使用できるマークがノンコマーシャルマーク、NCマークと書いておりますが、新しいエンブレムを創出して、こちらのマークを使うことができるという形になっております。

次に参ります。13ページ目です。それでは、プログラムの対象になる要件でございます。実施の基礎要件、こちらに書かれておりますとおり、公益性や非営利性などといった基礎要件に加えまして、大会ビジョンとの合致、全員が自己ベスト、多様性と調和、未来への継承、こういったビジョンと合致すること。さらにレガシーの5本の柱と合致すること。こちらを組織委員会が申請内容によって確認させていただくということでございます。

14ページ目です。基礎要件、こちら公益性、参加可能性、非悪質、非宗教、非政治、安全性、非営利性、適切性、このような要件でございます。

また、東京2020大会のスポンサーのマーケティングルールを遵守すること、こちらが大原則となっております。

15ページ目でございます。こちらは、イメージ図が真ん中に書いてあるのを御覧いただければと思いますが、このようなイメージで審査のプロセスを検討しております。

次に、16ページ目でございます。今後のスケジュールです。この秋から、この参画プログラムは始まるという形で、今、進めております。2016年10月からを考えております。

まず、初期の認証範囲、スタートということで、会場所在自治体、スポンサー企業、JOC、JPC、日体協、JPSA、JSCさん等が、まず対象となっていきます。今後、順次、認証の対象の範囲を拡大してまいります。それとともに、認証件数を増加させてまいりまして、大会の機運を醸成して、東京2020大会を迎えたいと。それで、今後は、その後は、レガシーとして継続できることになればいいのかなと願っております。

17ページ目でございます。今度、こちらは、アクション＆レガシーのスポーツ・健康

に関する認証についてということでございます。

まず、コンセプトは、先ほど申したとおりの、「スポーツの力でみんなが輝く社会へ」ということで、「東京2020スポーツ・健康プログラム」、これは仮称ではありますが、こういったものをリオデジャネイロ大会後に開始したいと思います。

18ページ目です。こちらのコンセプト、「大会ビジョンの実現」、「残すべき3つのレガシーコンセプトの実現」、誰もがスポーツを「する・観る・支える」社会の実現、アスリートが活躍する社会の実現」、パラリンピックを契機とした共生社会の実現」こういったものを実現するコンセプトとしたいと考えております。

それで、19ページ目、20ページ目と行きまして、21ページ目で、今後の展開ですが、認証プログラムを開始して、認証アクションを創出し、アクションを検討していきます。その間にさまざまな方からアドバイスをいただきながら、毎年プランを更新して、毎年ローリングして、よりよいものにしていくと、そのようなことを考えております。

今後の展開についてということで、本日、委員の皆様に御意見を伺いたいこと、三つほどございます。次のページを御覧ください。

まず一つが、今後予定されるアクションについてということでございます。お手元の机上配付資料4-4という少し分厚い資料がございます。こちらの資料に今年度の下半期にいろいろな自治体さん、あるいは政府などのほうで実施が予定されているアクションの一覧がございます。アスリートとの交流、競技体験、あるいはスポーツをする場は、競技の「聖地」をつくる取組、企業との連携による取組、アスリートの育成・競技力向上、キャリア支援等に関する取組、このようなものが予定されております。分厚い資料でございますが、こういったものを御覧になっていただいて、意見やアドバイス等があれば、いただきたいなと思いますのと、今後、発展・拡大が期待されるアクション、スポーツの参画人口の拡大やアスリートが活躍するためのアクション、あるいは心のバリアフリーを実現するためのアクションに関しての御意見を伺いたいと思います。

あと、二つ目でございますが、今、御説明いたしました、東京2020参画プログラム、これに関しましてアスリート委員の皆様として、どのような協力ができるか、あるいはこれをどのように運営していったらよいかといった御意見があれば伺いたいと。

さらに、三つ目。こちらが一番メインになるかと思うんですが、これまでアスリート委員会で皆様からいろんなアイデアを出していただきました。アクション＆レガシープ

ランに関しまして。

それらのアピールポイントについて、そのアイデアを具現化していくためには、どんな取組が必要か。アスリート委員会の皆様として、どんな協力をしていただけるのか、あるいはどのような主体が参画することによって、具体化が期待されるか。これは、添付資料の4-1検討用資料というのに、これまでアスリート委員の皆様がアイデアを出していただいたアクション例が載っておりますが、こういったものに関して御意見を伺えればと思っております。

私からの説明は、駆け足でございましたが、以上でございます。よろしくお願いいたします。

○高橋委員長

どうもありがとうございました。

たくさんの資料を一気に説明をしていただきましたけれども、委員の皆様には、事前に資料を送付させていただきまして、この資料4-1、今後の展開についてを中心に、これから皆さんに御検討をお願いしたいなと思っております。

1番のところは、こちらは、綴じてある、少し多いですけれども、これからの自治体、そして、政府の方がやっている事業ですね。今まで、いろんな皆さんにアクションをここで提案してもらいましたけれども、私たち以外にも、本当にたくさんのいろんなところが、こういったアクションを東京までにしているということです。

そして、一番意見が多くなるのであろうというのは、この3番のところだと思うんですけれども、3番のところは、今までいろいろな意見、アクションの例を皆さん、出していただいたと思います。資料4-1の検討資料という資料を見ていただくと、1番から6番まで、アスリートの意見、アイデアというのが書いてあります。それが、位置づけが、アクション＆レガシーにおける位置づけが、どこのコンセプトに当てはまるのかというところまで書いてありますが、これを、より具現化して、本当に実現に向けていくためには、どこにアクションを起こして、そのアクションを実現するためには、何をアピールをしていくかというところについて、何か意見があればと思っております。

それでは、皆さんから意見を頂戴する前に、河合さん、よろしくお願いします。

○河合副委員長

ありがとうございます。パラ水泳の河合です。

僕のほうからいろんな意見があったかと思うんですけども、やっぱり最近いろんな形でパラの競技を知ってもらうような動画とか、さまざまないろんなところでも作成していただいたCM等でも扱っていただいたりして、非常にわかりやすいし、扱っていただいて、非常に多くの人に知ってもらえて、いいツールだと思っております。

それで、先日、ちょっとパラリンピアンで勉強会をやったときに、障がい平等研修ですね、Disability Equality Trainingというものをやってみました。この中で、非常におもしろい動画を扱っていて、簡単に申し上げますと、主人公は障がいのない方なんですが、ほかの登場人物がみんな障がい者という状態で、障がいのないということがあたかも障がいのように感じてしまうという状況を疑似体験して、ワークショップをするようなものなんですね、簡単に申し上げますと。

そういうものの何かスポーツ版的なものというものも、今までやっぱり民間のスポーツクラブとかで使用ができなかったとか、さまざまな課題があったところを、何かコミカルかつシリアスにまた、捉えられるようなものというのも、こういうのができないかなとも、ちょっと最近思っているというのが一つです。

それで、何をするにしてもなんですけれど、今後、やはり我々がやっていきたいと思うことを一緒にやっていただける方々、もちろん組織委員会のアスリート委員として皆さんと一緒にやるんですけれども、我々だけではでき切れない部分がありますので、協力をいただけるスポンサーの企業とか、あるいは国や東京都の皆さん等にも聞いていただけるような、この我々が掲げたアクションの実現に向けたプレゼンの場みたいなものをつくっていただいて、一緒にやっていただける企業さんとか、先ほどの国とか、東京都さんとも接点をまた持っていただいて、これを公表するというのは、まず、一つかもしれませんけれども、より重点的に、まず、ここからリオ後、東京に向けての最初、こういうことからやっていきたいという思いを、我々が表明する場がつくれたらいいなとも思っています。

以上です。

○高橋委員長

ありがとうございます。

そうですね。今まで、このアクションの中でやれたところというと、東京マラソンに関しては、違う競技の人たちが、自分たちの競技を知ってもらうために、そういった場

所をつくってアピールをするといったところが、実現の一つかなと思ってはいるんですけれども。

私は、いろいろと意見はあるんですが、最初に例として出すのであれば、6番の「心のバリアフリー」への理解を広げるためにアスリートの体験談、また、冊子やホームページ等で発信するというところなんかは、多分書いてある全てが、何か私たち、こんなことを言っていいのか、あれなのかもしれませんけど、お金がやはりここで生み出せるわけではない。ここは資金がやはりあるわけではないので、私たちがその後ろだてと言いますか、一緒になってやってくれる人を探していかなければいけないわけですね。

なので、これが実現をするためには、例えば、東京都教育委員会のほうにかけ合わせていただいて、そういう冊子をつくるような依頼をお願いしていく。例えば、その冊子をつくるだけではなく、選手たちが、どういうような思いでその夢をかなえたかというような、そういった事柄も一緒に冊子にすることによって、よりアピールポイントとしては、アスリートを直に感じることができる。

また、私たちは会議をする前に、河合さんと一緒にお話をしたこともあったんですけれども、この委員の中の一人ひとりが、パラリンピアンの人と組んでもいいんですけれども、各小学校に行って、そして、直々に小学校の子供たちにそういった話をしていくような機会を得ることができれば、そういった教育委員会の支持を得ることができるのではないかということをアピールポイントにするなど。

また、何か冊子をつくるのであれば、逆に出版社に、今日もたくさんの皆さんが、後ろに聞いてくださっている方もいらっしゃいますけれども、何かそうやって書いてくれる人たちというところにアピールをすることによって、一つの本にして、この事柄を出版をするというのも、一つのアクションかなとも思っています。

そうすることでの、その企業さんや出版社へのアピールというのは、いろんな種目の人たち、競技の枠を超えて、いろんな意見をそこの人たちに入れることもできますし、パラリンピックの人たちのそういった意見を、心のバリアフリーという部分を入れることによって、何か学校の教材なんかにも使ってもらえるような、そんな本になればいいなというところをアピールしていくような形で、何かこの意見がしっかり実現すると、できるのではないかなというふうにも思っています。

といったような形で、何か今まで皆さんが出したアクション、何かこういう手段で具

現化ができるといった方法なんかもお聞きできるといいかなと。それをするために何がアピールポイントに、アスリートだからこそのアピールポイントになるかもお聞きできればいいかなと思っています。

何かそういった意味で、意見がある方いらっしゃいますか。

それでは、事前に提出をしてくれた方が、萩原さんもたくさんの意見を出してくださいましたけれども、萩原さん、意見を教えてください。

○萩原（智）委員

皆さん、事前に出していないんですね。私、結構マストで出さなければいけないと思って、一生懸命考えさせていただいたんですが。

いろいろ拝見していて、ちょっと順番が前後してしまうかもしれないんですけども、アスリートの交流というところでは、何か、今、ラジオ体操のようなものがあるんですけど、それって結構、年配の方がやっていらっしゃるというイメージが、今ついているんですけども、それを何か大会、2020年に向けて、東京2020体操みたいな、そういうものをつくって、全国共通でやっていけるようなことをできたらいいなと。高橋委員長がメディアに出て体操するとか、そういうようなアピールができればおもしろいのかなとか思っております。

あとは、このたくさんの上半期のアクション一覧を私も拝見させていただいたんですが、やはりスポーツイベント、スポーツだけに突出しているものが多いので、せっかくなら、スポーツと教育、何か環境であったりとか、スポーツって、いい環境がなければできないものなので、やはりスポーツと環境を含めたことができれば、企業さんも参画しやすい。

例えば、私なんかは水泳なので、水がなければ泳ぐことができない。飲み水がなければできないことなので、すごくぜいたくなスポーツを私はやらせてもらっているんで、できたらそういう飲料の企業さんと組んで、そういう教育のノウハウを持っていらっしゃるので、そういうことも含めて一緒にやっていけたらいいのかなというのは、感じています。

あとは、スポーツをする場ということで考えると、皆さんすごく、全国民が運動しようみたいな機運を高められるということを考えるとすれば、万歩計などの目標設定をつくって、その目標を超えたら、例えば地域の温泉が無料で入れるとか、そういう地域の

自治体であったり、施設と協力してやったり、その万歩計をつくっていらっしゃる企業とうまく連携をしたりというところができたらおもしろいのかなと思います。

あとは、アスリートのキャリア支援なんかで言うと、いつも言われていることなんですけれども、各都道府県に向けてトップアスリートの公務員採用の協力なんかもできたらいいのかなということも考えています。

そうすることによって、やっぱり地域の活性化にもつながりますし、横のつながりというのができて、合宿所の誘致であったりとか、そういうこともできて、地域がより盛り上がっていくのかなということも考えています。

あと、アスリート委員の皆さんが、いろんな地域から来られていると思います。私は山梨県出身なんですけども、そういったふるさとに出向いて、セールスマンとしてどんどんそういったことをアピールするということもすごく大事だと思うので、その辺はすごくいろんなアスリートに協力を得て、分担で行っていければいいのかなということも考えております。

いろいろありますけど、以上にしておきます。

○森会長

いいアイデアをたくさんね。

大畑君、トライを幾つしたらいいと、目標を設置をしたらどうだ。

○大畑委員

リタイアしてしまいました。

○高橋委員長

どうでしょう。

○大畑委員

こんにちは、大畑です。

僕自身は、前回の東京オリンピックだから、1964年の東京オリンピックというところには実際に生まれる前だったので、そういったものに対して何もわからないんですけど、その大会から通してのレガシーとして感じているのが、やはり体育の日、10月10日というところの体育の日というのが、そこにかからなかった人間としても感じれたかなというのがあるんですよ。

そういう意味じゃあ、今の時代とその当時の時代のスポーツの携わり方という感覚が

変わってきている中で言うと、やはりその一つ、体育というものが運動会であったりするように、今回のオリンピック・パラリンピックというところで言うと、やはり7月24日にオリンピックが始まり、8月25日にパラリンピックが始まるということで言うと、やはりこの2日間を通して、スポーツがやはり今は、結構垣根を越えてもそうなんですけど、その地域として根づいている部分が非常に大きいと思うので、できればこの24日、25日というこの毎月でも、年に2回でもいいんですけど、そこの中で、公共の施設であったり、公立の施設を子供たちに貸し出しであったりとか、スポーツをする、もしくは健康増進に当たって、そういったものをうまく使えればいいんじゃないかなというのは思います。

そして、そういったところをうまく使うこと。そして、東京オリンピック・パラリンピックの会場で使うことによって、リハーサルになったりすることになってくると思いますので、そういうこともできればいいのかなと思います。

○高橋委員長

ありがとうございます。

そういった、いろいろ今までもアクションを出してもらっていますけれども、そういったアクションの追加でももちろんいいですし、また、そのアクションを具現化するためのそういった考えでもいいですし、何か皆さん、ほかにも御意見はないでしょうか。

及川さん、よろしくお願いします。

○及川委員

車椅子バスケットの及川です。

まず、今まさに僕は、リオに行く車椅子バスケットボールのヘッドコーチをやっているんですけれども、チームのこういう活動を見て、何かこういうのとつながらないかなというのを今、考えていたんですが。一つは、リオが終わった後とかなんかは一番いいかなと思うんですけど、国際大会で日本に来たチームの直前のキャンプとかあるじゃないですか。事前に練習で入っていくと、その間の期間と地域を結びつけたりとか、何かそういうことができるんじゃないかなと。

一つ、北九州で国際大会をやっているんですけど、入ってきたチームが、まずは練習しながらも、各学校に回るんですね。体験学習をしていくんです。オーストラリアだったり、イギリスだったりが。それで、そこでイギリスを応援する小学校があったりとか、

オーストラリアを応援をする小学校があったりして、大会に入っていくみたいな縁をつくっている大会があって、直前のその事前キャンプとかそういうのをうまく有効利用して、アピールしていくというのは、あるかなというのは一つ思いました。

もう一つは、例えば、バスケットなんかは、同じ場所で車椅子バスケットもバスケットもできるので、例えば、健常のバスケットボールと車椅子バスケットボールを一つの大会としてやってしまうと。そうすることで、例えば、観客も、じゃあ、車椅子バスケを見て、じゃあ、バスケットを見ようみたいな、そういった時間もつくれるだろうし、スポンサーも一気に、我々にとってはバスケットのスポンサーをいただけるととてもうれしいので、大きなスポンサーにサポートしてもらって、その中にちょっと車椅子バスケットボールも入れてもらうみたいなことだったり、複数の競技で例えば、じゃあ、マラソンをやっているときに、こっちでバスケットもやっていますみたいな、マラソンだと車椅子のマラソンも一緒にやっていたりしますよね。

そういったそういう複合で、ちょっと大会のイベントを開くみたいなことは、一つの何か、オリンピック・パラリンピックという視点で、いいアピールになるんじゃないかなと思いました。

○高橋委員長

陸上も昨年からトラックが健常者と障がい者が一緒にやるような形のプログラムもあったりして、やはり初めて見た人はファンになって、どんどん拡大していくというところがありますけれども、そういうのが、やっぱり増えてほしいなとも思いますし。何か、本当にNFの皆さんの協力なしではできないと思うんですけれども、そういった協力をしっかりとこれから築いていかなければいけないんだなというのを改めて感じます。

ほかには。

池田さん、お願いします。

○池田委員

この六つの項目プラス皆さんの意見を聞いていたんですけれども、やはりこうなるプランの中で、ある程度スポーツに関心がある人の参画をベースに考えると、2020東京オリンピック・パラリンピックにある程度、ムーブメント、エンゲージメントを高めていく中で、リーチのかからない層にもアプローチしていきたいなというのが非常に。

特に、スタート段階では非常に大切だと思うんですね。ある程度、リーチをかかる状

態でいろんな策を打つことは、非常に大切だと思うんですけれども、ちょっと皆さんからどう思われるかわからないんですけれども、いろんな各分野のインフルエンサーってたくさんいて、例えば、僕、息子は5歳なんですけど、専らアイパッドでさくさくしながら見ていて、僕の家の中にいるヒーローは、HIKAKINなんですね。ユーチューブのHIKAKINというのがいるんですね。

ああいう、いろんなインフルエンサー、いろんなリーチを持っている人に、どうタイアップして、いろんな施策をやるというのも、実は、こういうスマホとかゲームとかやっていて外に出ない人の中にも、そういうところを使えばリーチが届くというところも、ある意味であるんじゃないかなって思っていて。

なので、ある程度、何かこのアスリート委員の中で、一つの大きな企画をして、そういう本当にリーチの届かないところから、最初、何か施策を打っていくだとか、ゲームと一緒にタイアップして、何かおもしろいゲーム、例えば、室伏さんの記録を何かを押せば、その数字がポイントとなって、リオからどんどんどんどん東京に何かが近づいていくのを、本当に多くの人とインボルブして、巻き込んでやっていくとか。何か、ちょっと大きなイベントでやるのも、非常にすばらしいことだと思うんですけど、ちょっと違う側面からの、今の若い層だったり、これだけスマホが普及している中で、本当に手軽にやれるものって何だろうなという。

この暑い中で、外で一緒に歩くというところが、実はハードルが高いかもしれないし、だったらこの中でやって、そこから動線をひいて誘導していくとかというのも、ある程度、可能性としては、オプションとしてはあってもいいのかなというか、オプションではなくて、僕はやってみたいという気持ちが強くてですね。何かそういうリーチのかけ方というのも、非常に施策としてはおもしろいなというのを個人的に思います。

○高橋委員長　まさに、1番のこの「リオから東京に歩いていこう」、これはスポーツとして走ったり、また泳いだり、また体操の中でそれをポイント化してどんどん進めていくのを、全国から皆さんに参加をしてもらってというところのスポーツ版じゃない部分というところにも関わってくる。スポーツをやらない人にも、それで御参加をする。

○池田委員

そうですね。スタートはリーチ。いろんな方にリーチを広げるのもいいのかなという。

○高橋委員長

広げていく。そして、みんなが参加をできるような形にしていくというのも。

○池田委員

そうですね。

○高橋委員長

ひとつおもしろいのかなと、今も、聞かせてもらって思いました。

もちろん、こちらのほうは、やっぱり必ずソフト開発が必要になってくる、アプリなども含めて必要なものだと思うので、例えばJOCだと、ドコモさんと協力をしていますけれども、そういった何かオリンピックに関係するスポンサーなんかにアプローチをして、アピールポイントとしては逆に、先ほども室伏さんと言いましたけれども、例えば、今日は水泳だったら、入江君がどれだけ泳いだかというのを提供してもらえることができれば、その人に勝ったというような、何かアスリートと一緒にすごく身近に感じてもらえたり、または、そういったイベントをどこかで大会としてやって、みんなでそれを一気に加算させていくというような形にして、参加型……。

○池田委員

みんなでチャレンジするのもの何か、一緒になって、1対1万人とかで、その記録を抜くというのもおもしろいと思いますし。

○高橋委員長

そうですね。イベントだったり、それが機関であったりということを組みながら、こうやっていくことも可能なのかなというふうには。

○池田委員

何かリアルと現実をちょっと結びつけるのも、イノベーティブというところも入ってくるのかなというふうには、個人的に思います。

○高橋委員長

へえ。これを何かアポイントするのは、政府だと、スポーツ省、文科省、厚生労働省というところになると、健康増進ということをお願いして、何か厚生労働省ということもあるかもしれないけれど、なかなか難しいのかなと思うと、やはりスポンサーに向けて。

また、今の話で、このアスリート委員会だけではなく、各アスリートの人たちに参加をしてもらって、そういったアスリートを間近に感じてもらえるような、そんな取組で

あれば、そこもアピールポイントにはなるのかなと思うんですが、やはりそれも、NFさんにしっかりと説明をする責任が要るのかなというところも、すごく感じています。

何か、ほかに意見がいらっしゃる方、ないでしょうか。たくさん出ました。

齋藤さんからお願いします。

○齋藤委員

ウエイトリフティングの齋藤里香です。

今も高橋委員長のほうから、NF とのコラボというようなところ、NF さんとの協力というようなお話がありましたが、今後、東京大会に向けて、それぞれの競技で、国際大会等々、日本で開催というところが増えてくると思います。

そういった国際大会の中で、NF と組織委員会と協力して、イベントというか、スポーツ教室を開催する場を、少しの時間でも設けてもらったりだとか、そういうところができていくと、多くの人を巻き込んでという形でできるんじゃないかなとは思います。

あとは、私は今、福岡県に住んでいるんですが、東京と離れていて、個人的になのかもしれませんが、東京 2020 に向かってというところと、ちょっと一歩離れたところでというような雰囲気を個人的には感じております。

そういった意味でも、この移動スポーツ教室というのを、今、東北のほうはいろんな企画があったりというところがあると思うんですけど、東京、それから東京近郊だけではなく、日本中でできればいいなと思います。東京オリンピックが東京の人だけのものではなくて、日本全体で盛り上がってということを考えると、そういうところがあってもいいんじゃないかなというのは、個人的には思っているところです。

それで、今、2016 年のアクション一覧というのを拝見しましたら、いろんなイベントがあって、ちょっと驚くぐらいたくさんあったんですが、そういった中でマラソンだとか、ウォーキングだとか、個人でできるもの、そういったものももちろんいいんですけど、せっかく人が集まったんだったら、みんなで何かを行うというようなところがあっても、少しおもしろいんじゃないかなというふうに思います。

それが、もしかしたら以前、どなたかがおっしゃっていた、運動会のようなものであるのかもしれませんし、そこはいろいろ案は出てくるんだとは思いますが、ちょっとみんなで何か盛り上げるというような、みんなの力で何かをつくっていくというようなイベントがあっても、おもしろいんじゃないかなというふうには感じております。

それで、先ほど池田さんが言われたように、無関心層というところというのは、私もすごく取り込んでいきたい、いかなければいけないというところにはなってくるんだと思いますが、以前にも少し、全然スポーツに関係のない子育てのイベントでとかというところもお話させていただいたんですけど、私はウエイトリフティングなんでお化粧をしない競技ですけど、例えば、体操だとか、フィギュアスケート、冬にはなりますけど、そういうお化粧をするような競技の人が、化粧品メーカーと一緒にお化粧教室をやって、みんなにもそのメークを体験してもらってというところから、ちょっとスポーツを身近に感じてもらったりだとか、そういったところが、いろんな各競技でできていくところがあるんじゃないかなというふうには思います。

そういったところから、本来、競技というところを見ていただきたいのですが、そこに向けての第一歩として、無関心層を取り込んでいく一歩になればいいんじゃないかなとは感じております。

○高橋委員長

ありがとうございます。

田口さん、お願いします。

○田口委員

射撃の田口です。

私は、2月に高橋委員長たちとこの東京マラソンEXPOに出演させていただいて、キックオフということだったので、これがずっと続くのかなと思っていたらちょっととまってしまって、それは、すみません、私もその後、誰にも、待っていた立場だったので、それはだめだったのかなと思うんですけど、こういうのをやっぱりどんどんどんどん続けていったほうがいいのかなと、リレーのようにですね。

それで、実際、私の知り合いも、このTシャツが欲しいがためにこの会場に足を運んで、そこで、たまたま私がいるのを見て、そして、ボッチャという名前を聞いて、その後、ニュースでボッチャと聞くと、やっぱり興味を持ったと言われたんですね。

ほかにも会社の同僚とかで、これも高橋委員長がこの間いらっしゃっていたんですけれど、銀座で行われた5月のNO LIMITS CHALLENGEですね。あれも、会社の人を何人か連れていったんですけど、それまでパラスポーツに全く興味のなかった会社の人たちなんですけど、その後から私に、ニュースで何かパラスポーツがあるたびに、いつもしゃべ

りかけてくるんですよ。昨日、ボッチャあったよとか、昨日、パワーリフティングをテレビでやっていたよと。

そういう意味では、やっぱり少しずつ地道なのかもしれないんですけれども、こういうのをどんどん積み重ねていくことが、必要なんじゃないのかなと思いました。

あとは、実際、会社で私は働いているんですけども、皆さんおっしゃるのが、子供たちのほうが、今パラスポーツとか、いろんなスポーツに対して触れる機会がある。学校とかにそういう情報とかが来るけれども、私たち社会人は、普通にいると何もわからないと言われたんですね。いろんなイベントがあったりというのですね。

それで、実際に今日も、会社でちょっとこういう会議があるからと思っていろんな話を聞いていて、そこで思ったのは、スポーツはみんな苦手だというんですけど、例えば、室伏スポーツディレクターが今されている、若手参画プロジェクトのようなああいう、イモムシサッカーでしたか。ああいうのとかも、大人の人たちも参加できるようないろんなイベントをどんどんしていって、そのスポーツが苦手でもやっていけるような、そういうイベントをやっていって、それをもっと企業とかに発信していくのも必要ではないかなと思いました。

例えば、私の勤めている会社でしたら、グループの運動会とかがあるんですけれども、ちょっといろんな企業、今の時代そういうのをやっている企業がどれぐらいあるかはわからないんですけれども、そういうところに例えばアスリートが行って、いろんなことをやってみるというのも一つの手かなと思うんですね。会社の男性一人が興味を持つと、その人が奥さんとか子供を連れて試合を見に行ったり、一緒にスポーツを楽しむというのも広がっていくかなと思いました。

それで、いただいた資料、このたくさんのを見て、私も昨日ちょっと今、こんなにやっているんだと思ったんですけども。これをどのように、公式認証プログラムというように、どれがそれというのがちょっとわからなかったんですけれども。例えば、この2020大会公式認証プログラムというものを、言葉で言うとスタンプラリーのようなもの。例えば、今でしたら、スマホで国盗りというのがあるんですね。その場所に行って電波をキャッチすれば、そこの国をとれると。どんどんそれを制覇していくというゲームというか、アプリがあるんですけれども。そういう感じで、この大会公式認証プログラムは、どんどんアプリで参加するとか、見るとか、支えるとかで、そこで何かをすれば、

それをどんどん潰していけて、そうなると、参加している人もおもしろくなってきて、遠くでも行こうかなと思ったり。実際、その国盗りは旅行会社がバスを出して行くぐらいなんですね。

そういう何か、どんどんやっていくことがおもしろくなっていくシステムをつくってみては、どうかなと思いました。

以上です。

○高橋委員長

ありがとうございました。

まずは、東京マラソンでキックオフをして、続けてなかなかできなくて、本当にアスリートの皆さんに申し訳ないなと思っております。

名古屋ウィメンズと、そして、ぎふ清流の二つは体制的には整っていて、実はもうすぐやれるような状況ではあったんですけれども、なかなかゴーサインが出ずにそのまま終わってしまったんで。今、田口さんがおっしゃられたように、継続をしていく。少しずつでも前に一歩ずつ行くということは、すごく大切なことなのではないかなと思うのと同時に、この中に挙げた中では、やはりできたものの一つとしては、そういったやれるといった部分が大きいものだと思うので、これからも少しアプローチをかけていきたいなというふうに思っています。

もちろん東京マラソンのときは、ここにいらっしゃる皆さんに協力をいただきましたけれども、わがまちアスリートとかけ合わせてということでもないですが、地方でやったときには、地方のアスリートの中には、もともとオリンピアンの選手もたくさんいるでしょうから、そういった選手をこのアスリート委員会だけではなく、JOCのアスリート委員会の人たちと協力をしながらでも、街々でそうやって立ち上がってイベントをやることによって、もっともっと地方にも広がっていくのかなという形もあります。こちらはしっかりと継続できるようにしていきたいと思います。

それでは、ほかに御意見はあるでしょうか。

すみません、時間も迫ってきておりますので、たくさんの意見をどうもありがとうございました。委員の意見は、プランの策定やプログラムの運用等にこれからも活かしていきたいと思っております。

アスリート委員会としても、できる限りの協力をしていきたいなと思っていますし、

やはり、しっかりとした、私たちも責任者を立ててといいますか、しっかりとそのネットワークを私たちの中でも持ってやらないといけないのかなと、もっともっと細かく一歩ずつ進んでいくためには、もう少し組織委員会の中でも、このアスリート委員会の中でもネットワークを持っていかなければいけないなというのを感じております。

それでは、続いての議題に移りたいと思います。

最後の議題となります。アスリート委員会の今後の運営についてです。資料の5の1ページを御覧ください。

アスリート・ファーストの大会を実現して、大会の先のレガシー創出や大会へのエンゲージメントを推進するために、このアスリート委員会のもと、2つのワーキンググループを設置して、アスリートの意見を一層活かせる体制をこれからつくっていきたいと思っています。

このアスリート委員会では、たくさんの意見をいつも言っていただいていますけれども、なかなかもう一歩先に踏み込んだ意見を交わすことというのは、できないでいるのが現状だと思いますので、そこを今まで、この件については、これまでも河合副委員長や室伏スポーツディレクターとともに検討を重ねてきたんですけれども、そういった形で二つのワーキンググループに分けることにより、よりもう一歩進んだ話し合いができるというような体制をとりたいと思っております。

本日は、ワーキンググループの進め方などについて、皆様に御意見を頂戴したいと思うんですが、まずは、室伏スポーツディレクターから、そちらの説明のほうをよろしくお願いします。

○室伏SD

室伏です。

資料5を御覧ください。アスリート委員会の今後の運営についてという資料です。

1枚おめくりください。この趣旨なんですけども、アスリート・ファーストの大会を実現し、大会の先にレガシーを創出する活動やエンゲージメントを推進するため、委員会の下に2つのワーキンググループ、分科会を設け、アスリートの意見をより一層活発にするような体制をつくっていくということが趣旨になっております。

次のページです。これまでの経緯なんですが、今年の1月の20日に、IOC　OGKMワークショップが開催されました。ここでは、アスリート・ファーストの環境整備に向けた

NOCサービスワークショップということで開催させていただきましたけども、そこにIOCのアスリート委員会委員長のクラウディア・ボケルさん、そして、ロンドンの大会のときのアスリート委員長のジョナサン・エドワーズさん、この方は三段跳びの世界記録の方なんですけども、であったり、ロンドンのNOC/NPCサービスのヘッドの方であったり、また、東京側からは、高橋委員長、河合副委員長、関根さん、田口さん、土田さんと参加していただきました。また、そのほか、JOC、JPC、JADA、日本の国内のアスリートも参加していただきました。

議題なんですけども、内容としましては、ロンドンと東京の組織委員会におけるアスリート委員会の役割と活動について、報告。そして、東京のアスリートサービスレベル議論の過程における、アスリートの関与等について意見交換をさせていただきました。

次をおめくりください。3ページ目。今年は、調整委員会が5月に行うことができなくて、5月25日にIOC Executive Meetingが行われまして、そこで、アスリート委員会の進捗状況について、私のほうから、以下の3点について報告させていただきました。

まず、アスリート委員会の下にアスリート・ファーストの大会の実現、アクション&レガシーやエンゲージメントの推進などによって、具体的な検討を行うため、2つの分科会、ワーキンググループを新設するということ。その二つのワーキンググループの検討内容については、アスリート委員会へ報告し、委員会から理事会へ報告するという流れを積極的に、また、情報発信していくということ。そして、3点目の11月のIOC調整委員会にワーキンググループの体制等について報告を行うということの報告をさせていただきました。

コーツ調整委員会委員長からも、「素晴らしい提案であり、期待している」等のコメントをいただきました。

次の4ページ目ですけども、3と書いてある、委員会の構成案。これは図になっているわけですけれども、一番下のWG1とあるのが、分科会のワーキンググループ1。そして、WG2というのが、ワーキンググループ2と。それぞれここで十分にアスリートによって議論したものが、アスリート委員会に提案され、そして、理事会に報告であったりするという、こういう一つの流れをつくっていくと。

関係FAとの連携だったり、JOC、JPC、JADA、NFとの協力も不可欠です。

次のページをおめくりください。ワーキンググループについての説明をさせていただ

きます。

WG1について。これは主にアクション＆レガシー、エンゲージメントの推進。まさに、今、皆さんが活発に議論していただいた内容に即しているかと思います。アスリート委員会で確認した方向性を備え、具体的なテーマや活動に関する検討を行っていくと。

検討テーマの例ですと、スポーツ・健康の分野のレガシー創出に向けた活動実施について、大会エンゲージメント活動へのアスリートの関わり方についてということで、本当に今まさに議論していた内容になってくると思います。参加メンバーは、アスリート委員会のメンバーのうち、参加可能な方。必要に応じて組織委員会内外の関係者を加えていく。運営方法については、関係FAとも連携し、テーマに応じてワーキンググループを活用した検討や意見交換を実施していくと。アスリートの具体的な意見を、アクションの検討等に活かしていくということになっております。

次のページ、WG2、分科会2のほうなんですけれども、これはアスリート視点での大会運営を実現していく。

選手へのサービスレベル策定の過程でアスリートが主体的に関与して、確実な大会運営計画策定に貢献していくと。

検討テーマですけれども、例えば、選手村の居住環境であったり、附帯施設、サービス、空港から到着してから、選手村、会場への移動のそういった輸送。ダイニングホールでのフードサービス。会場での動線やラウンジ等。特に30分以上かかるそういった会場施設などありますので、そこでアスリートが休憩できるようなラウンジ、そういったことが設けられますが、そういったところでのディスカッション。

参加メンバーなんですけども、ここ最近、中心メンバーとしては、近年の大会に参加、最近のオリンピックに参加しているアスリート、また、アスリート委員のメンバー、組織委員会の理事の方であったり、JOC・JPCアスリート委員会や、議論のテーマに合わせて可能なメンバーが対応していくという状況です。

運営方法に関してですけども、各FAの既存の会議等に、我々のそのやっている会議にアスリートが入っていただいて、そこで一緒に議論していただくということと、また、我々アスリートのほうが自分たちでテーマを決めたり、また課題を設けて、それを主体的に取り組んで、また、組織委員会のほうにぶつけていくというような形をとっていきたいと思っております。

次のページをお願いいたします。今後のスケジュールなんですが、今現在、リオの大会前にWG2のメンバーの調整を今、開始しているという状況です。それで、リオの大会中なんですけれども、WG2の活動開始と同時に、現地でのアンケート調査、リオでのアンケート調査を今しようということで準備しております。

今回、オリンピックに、リオに参加するアスリートを中心にアンケート調査、例えば、空港での手続き、空港から選手村までの到着であったり、選手村内での生活や会場への移動、メディカルなサービス、セキュリティ、安全面であったり、そういった文化教育プログラム等のそういった項目を今、考えているところです。

それで、10月以降なんですけれども、WG1・2と随時テーマに応じて活動をしていくことを検討しております。それで、調整委員会が今年は11月になりましたので、IOCの調整委員会でワーキンググループが発足したことと、活動内容などを報告していきたいと思っております。

なお、今回のアンケートについてなんですけども、当然パラリンピアンのIPCとも重ならないようなアンケート内容で、ぜひそのパラリンピックでも実施していくように、今、段取りをしていこうと、組んでいこうとやっております。

以上で終わります。

○高橋委員長

ありがとうございました。

それでは、皆さんからの質疑応答、意見交換などを行いたいと思いますが、今の室伏スポーツディレクターの説明をお聞きして、何かそういった意見がある方は、ぜひ挙手をお願いいたします。

今までアスリート委員会で、先ほども言わせていただいたようにたくさんの意見を出させていただいていますが、なかなかその先に一歩進むことができないといった部分では、やはりもう少し頻度も多く、そしてまた、もう少し踏み込んだ意見交換ができる。実現に向けてもう少し、アスリートが関わっていけるような形にするためにも、こういったワーキンググループをつくるほうがいいんではないかという話し合いを河合副委員長、そして、室伏スポーツディレクターとずっとしてまいりました。

このアスリート委員会がなくなるという、そういうわけではなくて、アスリート委員会はそのまま、逆にWG1・2のやってきたことをここで報告して、また皆さんで検討をし

ていくような形で、もう少し深くできたらいいなというような意見の中から出てきたような形です。

まだ、委員の選定というのは、これから話し合いをしながらということですし、先ほども室伏さんから言われたように、WG2のほうはこのアスリート委員会だけではなく、本当にいろいろなアスリートの人たちが関わってこれからやっていく。やはり思いを一つにして、東京を成功に導くといった部分では、これから少しだけ体制が変わる、少しというか、大きく体制が変わっていくのかなという形はあります。

何か意見等はございませんか。よろしいですか。

それでは、これからもワーキンググループを含めたアスリート委員会の活動を今後、さらに充実させていきたいと思いますので、皆様には一層の御協力をお願いしたいと思います。

以上で、予定していました議事は全て終了いたしました。本当は皆さんに意見を頂戴したかったんですけれども、議題もたくさんありましたのと、時間が少し限られていたので、皆さんに意見をいただけなかったことを大変申し訳なく思います。

本日のこの締めくくりに当たって、森会長から一言、どうぞよろしくお願いいたします。

○森会長

どうも、長時間、また御熱心な議論をありがとうございました。

政府側と東京都お二人、何かありませんか。十分いい意見がありましたね。

○芦立臨時委員

もう御用聞きをさせていただいております。

○森会長

特に、さっき田口さんが言われた、教員のことについて、とても良い意見をおっしゃっていましたよね。

○芦立臨時委員

政府も、今、文科省も入れ込んだ形で、ユニバーサルデザイン全体で2020年以降も見据えて、教育も変えていこうということで、知恵を絞っているところでございますので、ぜひここの御意見なんかも参考にさせていただきながら、いいものにしていきたいと、かように思っております。

○森会長

でも一方では、新聞によれば、クラブ活動とスポーツの指導が少し強化があって、土日、要は、先生方はそういうことはやらなくていいんだというようなことを文科省が言っているというニュースを見たけど、ほとんど皆、ボランティアで、土曜日も日曜日もやって。また、土曜・日曜日に出ているチームじゃないと強くもならないし、選手も強化されていないんじゃないかな。そんなことを決めちゃっていいのかな。

○芦立臨時委員

ちょっとスポーツ庁で、今、いろいろ検討しているところのようでございますが。

○森会長

そういうことをもっと言わなきゃいかんのですよ。教員の採用なんて東京都だから。各地方の教育委員会ですからね。いくらスポーツやれやれといっても、富山県にそういう担当の先生がいないとか、島根県にはいないとか、そうなっているんですよ、現実はね。

だから、そういうところをうまく回転をしていかないと、本当に日本中の皆さんが、本当にスポーツを楽しく、スポーツを一生懸命やるという体制ができないということになる。私がまあ言っちゃいけないのだけれども、問題点を一つ提供しておきます。

今日は、本当に皆さん御苦労さま。ありがとうございました。

委員長、ありがとうございました。

○高橋委員長

森会長、ありがとうございました。

それでは、最後に事務局から事務連絡のほうをよろしくお願いいたします。

○桑原部長

本日は活発な御議論をいただき、ありがとうございました。

最後に1分だけちょっと時間をいただきまして、事務連絡をさせていただきます。

本日お話しさせていただきましたアクション＆レガシープランに関しましては、今月25日の理事会にて審議の上で公表する予定でございます。今後さらに追加の意見等、アドバイス等がございましたら、事務局のほうまでメールをお寄せいただければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

あと、資料の取り扱いに関してですが、今日の議事次第の下にちょっと小さく四角で

囲ってありますが、資料2、4-2、4-3、4-4、こちらのメインテーブルのみの配付とさせていただいておりますので、委員限りで御覧いただいて、取り扱いに注意いただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

あと、本日の議事概要は、皆様のお名前を伏せた形で作成し、皆様に御確認いただいた上で、ホームページ上で後日公表させていただきたいと思います。

あと、お手元に1枚、リオ大会期間中、ライブサイトの御協力のお願いというシートを配付しております。後日、改めて御協力のお願いを事務局のほうから差し上げたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

あと、お手元に「2020たより」という組織委員会のニュースレターが創刊されました。配付してありますので、御覧いただければ幸いです。

最後になりましたが、次回アスリート委員会の開催時期に関しましては、委員長とも相談の上、改めて委員の皆様に御連絡させていただきたいと思います。

事務連絡は以上でございます。ありがとうございました。

○森会長

名前はみんな書いて、議事録には書かないと言っているけど、今日はみんなメディアが聞いている。

○中村局長

確かにそうですね。もうこれはオープンになっていますので、御了解いただければ名前もオーケーですし、場合によっては、音源をそのまま録音で聞けるとか、そういうことでもよいのかなと。工夫いたします。

○森会長

委員の同意があるのに、あえてそんなことを言うのはおかしいのではないか。

○桑原部長

承知しました。

○高橋委員長

ありがとうございました。

よかったです、時間の4時までに終わることができて、ほっとしております。

暑い中、アスリート委員会に参加をしていただきまして、どうもありがとうございます。少しこの5回から6回が時間があいてしまいまして、これからリオがございますので、

皆さん、オリンピック・パラリンピックに関わる方もいらっしゃるとは思いますけれども、また、きっとその後になると思います。少しでも皆さんの意見がしっかりと実現できるように、これからも取り組んでまいりたいと思いますので、どうぞ皆さん、これからもよろしくお願いいたします。

ありがとうございました。